

# 聞名仏教

第 170 号 毎月発行  
(発行日) 2024 年 11 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutsuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号 17810 番号 7259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

## 念仏は称えるが 佐々木蓮磨

ある日のこと、一人の老婆が寺に参りまして言うには「ご院主さん！私はまことにつまらぬものであります」と。

そこで私は「どんなにつまらぬのですか」と尋ねると、お婆さんの言うには「私は若いころから寺に参って、

ずいぶん長いあいだ仏法を聴聞したのですが、今になってみると別にどうなった

というでもなく、昔と変わらぬ浅ましい心ばかりで、まことにお恥ずかしいしい

いでありませう」と申しますから、「それでは念仏は称え

られますか」と聞くと、「念仏だけは、どうにか称えさせて

いただいたいております」と答えましたから、私は、

「お婆さん！念仏だけは、どうにか称えている、とは何事ですか。阿弥陀如来の本願は、私どもに念仏する

一つで助ける、と呼んでい

て下さるのではありませんか。今あなたが念仏だけでは称えていると申されますが、それだけで十分ではありませんか。問題は念仏だけでは物足りぬように考えておられるあなたの心であります。

まだまだ自分の心を立派にして、それを役立てようとする自力作善の気持ちが強

いものですから、ただ念仏する一つで助けて下さる本願のありがたさが分から

ぬのです。あなたは若いときから、長らく聴聞したと言

っておられますが、それは聴聞の時間が長いばかりで、聴聞の仕方が間違っ

ておったのです。今晚、お仏壇の前に坐つて、たとい五分間でも、ほん

とうに心が一つなれるか、お慈悲のことばかりが思われるか、と吟味してごらん。おそらく落第でしょう。わ

ずか五分の間すらも落第で

す。況んや一生の間、及第のできるためしはありません。そのようにして自分の心を深く吟味して行きますと、ただ念仏を称える一つで助けるといふ本願の思し召しがいかにありがたいか、またいかに尊いか、ということがシミジミと知れてくる

でしょう」と申しましたところ、今のお婆さんは目を丸くして「ご院主さん！私は今まで幾十年の間、全く方角違いの聴聞をして

おりました。口に念仏は称えておりながら、念仏の一つで助けるとある

如来の本願をよそにして、ただ徒らに自分の心をよくすることばかりにかかつて

いた私の間違いに驚きました」と言つて、念仏もろとも喜んで

帰りました。まことに本願の救いは目の前に差し出されているのであります。

多田鼎師は「本願の念仏

は『いつでも』『どこでも』『たれでも』いただける救いである」と。また古聖のことばに「道は近きにあり、人これを遠きに求む」というのがありますが、本願念仏の救いが全くその通りであります。

誰でも、今、ここでいただくことのできる救いであり

ます。問題は人間、否、自己自身の心の姿が知られているのか、どうかの一点

にあるのです。親鸞聖人は「己が能を思量せよ」とも「己が分を思量せよ」とも

仰せられております。念仏の救いがただけ

なのは、智慧がないからでもなく、学問がないからでもありません。自分そのもの

の値打ちが分からないからであります。世間の智慧は外に向かう智慧であり、仏道の智慧は内に向かう智慧

であります。(『信心清話』一九七〇年刊)より)

# 対話編 『浄土真宗』

16

A 「ずっと第十八願成就文のお話をしていきますが、今回は第十八願成就文である

諸有しようの衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向えこうせしめたまえり。かの国に生まれんと願ねがすれば、すなわち往生を得、不退転ふたいてんに住せん。

(仏説無量寿経)

の(かの国に生まれんと願ねがれば、すなわち往生を得、不退転ふたいてんに住せん)のところのお話です」

B 「(かの国)とはアミダ仏のお浄土だと思えますが、ここで(生まれんと願ねがれば)とありますが、これはどのような受け取ったらいのでしようか」

A 「これは名号に於いてアミダ様が(そのままなりで我が浄土に生まれさせる)というアミダ仏のお助けの

仰せを聞いて、それに信順

する人は(ああ浄土に生まれさせてくださる。有り難い。それなればどうぞ浄土に生まれさせてくださいませ)というお心がおのずから起こってきます。それが(生まれんと願ねがすれば)というお心です」

B 「では次に、そう願う人は(すなわち往生を得、不退転ふたいてんに住せん)とは」

A 「本願を(我がため)と受け取る人は(すなわち往生を得)るのであつて、(すなわち)とは即座にという

ことです。即座に浄土に往生する身に定まるのです。それゆえ往生できる身と定まった者は(不退転ふたいてんに住せん)で、もはや二度と迷いの境界に退転することのない身にならしていただくのである、とのお心でしょう」

B 「なぜ第十八願を信じた人は浄土に往生できる身と

なるのでしようか」

A 「浄土に生まれるべき身になるといつても、今の私が特別な者に変身することではありません。本願を信じた信心は仏心をいただいたことであり、仏心の本質は智慧と慈悲ですから、信心をいただくと智慧をいただくのです。この智慧にだけると知らされるのです」

B 「その智慧とは」

A 「前回申しましたように、私(人)ははかりなきいのちのアミダ仏と一つだということですから。アミダ仏の御いのちを離れて私は存在しないということを知る、そういう智慧です」

B 「そういう智慧をいただくということが、(往生を得る)ということなのですね」

A 「ええそうです。現在只今からアミダ様に全面的に摂め取られている身と知らされるのですから、死して

どこに行くかといつてもアミダ様の御いのちの場にしか行きようはないです。有り難いことす」

B 「アミダ様のいのちの場とは」

A 「アミダ仏のいのちの国です。浄土です。仏説無量寿経には(無量寿国)と説かれています。まさに無量寿の国、はかりないのちの国です。国とは領域ということ、はかりない大悲のいのちの領域が浄土です」

B 「その浄土に往生する、いわば浄土に往き生まれるのです」

A 「ええ、浄土に往生する人生を生きることは浄土の方向に往くことであり、死を縁として浄土に生まれる、そういう道が浄土往生の道です」

B 「浄土の方向に歩んで往くことなのですね」

A 「ええそうです。浄土の方向に歩んで往くという自分の足で歩んで往くように思います。実は浄土に運ばれていくのです。私を乗せて浄土へと運んでくだ

さるのです。それを(自然)といひます」

B 「自然とは」

A 「おのずからしからしめられるということです。アミダ仏のいのちのはたらきの力によっておのずからしからしめられる、すなわちおのずから運ばれていくのです。アミダ仏の本願の力によつてです」

B 「アミダ仏のはたらきに今も(運ばれている)のですね。浄土に運ばれているというのは」

A 「アミダ仏のいのちのはたらき、いわゆる本願力に於いて、これについて宗祖は、

乗我願力といひは、乗はるべしといひ、また智なり、智といひは、願力にのせたまうといひるべしとなり。願力に乗じて安楽浄刹にうまれんとしるなり。

(尊号真像銘文)

と仰せられています。アミダ仏の大悲のいのちのはたらきである願力に乗せてく

ださる。乗せてくださって

いると（知る）、これが信心の智慧です。乗るといふことは、今ここを離れて私の外にある何かの（乗り物）に乗るといふことではなく、今ここにはたらいっている大悲のいのちのはたらきに（置かれ、乗せられ、運ばれている）と（知る）ことの外にはありません。これが信心の智慧です」

B 「大悲のいのちのはたらきに乗せられているのですね」

A 「ええ実は万人が乗せられているのですが、それに気がつかないから、いつまでたっても大悲のいのちが実感できないで、孤立した境地に閉塞されたままなのです」

B 「万人がすでに大悲のいのちのはたらきに乗せられているのですね」

A 「ええそうです。それを近代の真宗の高僧である清沢満之師は、

自己とは他なし。絶対無限の妙用に乗托して、任運に法爾に此の現前の境遇に

落在せるもの、即ち是なり。

と表しました。万人、一人一人の本当の自己は、絶対無限の妙用であるはかりないいのちのはたらきに、乗せられていて、今ここにちやんと置かれていて。そういう自己なのだ近代的な表現で表してくださいました。そういう絶対無限のはたらきにおいて、私はここに置かれ、生かされている存在だという目覚め、これが信心の智慧なのです」

B 「万人がすでにアミダ仏の御いのちに運ばれているなら、みな浄土に生まれるのではありませんか」

A 「智慧が無く、アミダ仏の御いのちの中にいて運ばれていても、それに目覚めていなければ、その人は自分の迷い心の想念によって描いた世界に閉塞されたままです。ちょうど母親の手に抱かれて赤子が悪い夢を見て、母親の手に抱かれて

いることに気がつかず、悪い夢の中でおびえているような状態です」

B 「（不退転に住す）とは」

A 「これは先ほども申しましたが、もはや二度と生死流転の迷いの境界に戻らないということですよ」

B 「でも現在はまだ迷いの世界である人間界の中ですね」

A 「ええまだ（人間界に在る）ということは煩惱具足の身を抱えていますから、迷いの世界にいることに変わりはありませんが、煩惱の身でありながら、有り難いことにアミダ仏の御いのちにしっかりと抱かれていて、アミダ仏と離れなくなっている、そういう状態です」

B 「煩惱の身であるにもかかわらずアミダ仏の大悲のいのちに攝取されているのですね」

A 「ええ、そういう状態をいろいろな譬えでいわれます。親鸞聖人は、<sup>あかつき</sup>暁になつた状態といわれます。夜が明けかかっている状態。まだ夜であるが、しかし夜が明けつつある。夜であるが太陽が出かかって明るく

なつてきている状態、こういう譬えで語られています」

B 「分かりやすい譬えですね。闇はまだ残っているが太陽の光が入ってきて、未来は明るいという何とも有り難い状態ですね」

A 「ええ。それからこんな譬えを聞いたことがあります。信心の人は迷いの海の中の魚ではあるが、網の中に入った魚で、すぐに陸（浄土）に引き上げられようとしている。まだ海の中に入っているが、救いの網の中に入っている魚のようという、こういう譬えもあります」

B 「アミダ様の救いの網に入れられているのだけれども、今はまだ迷いの海の中ということですね」

A 「ええそうです。そういう身のことを（不退転に住す）といわれるのです。未来は明るい、確かな希望の中に生きることができるとです」

B 「単にあてにならない希望ではなくて、確かに実現する希望の中に生きるのですね。それは現在がすでにアミダ仏の大悲のいのちに

一つにされているから」  
A 「ええ、これが歎異鈔第一章に、

弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏もうさんとおもいたつころのおおるとき、すなわち攝取不捨の利益にあずけしめたまうなり。

といわれている（攝取不捨の利益）です。弥陀の誓願である（わが名を称えるばかりで汝を引き受ける、助ける）という不思議なお助けを聞いて、（ああこんな者を）と受け取る、その時、アミダ仏と離れない身であること、すなわちアミダ仏に攝取されていることを知らしてください。弥陀の誓願は私にこのような利益を与えてくださるのです」

B 「攝取不捨の利益をいただくとは煩悩はどうなるのですか」

A 「アミダ仏にあつて<sup>あかつき</sup>暁になつたといえども、我が身のあるかぎり煩悩はなく

なりません。老・病・死の不安は絶えず、愛欲・名利・勝他の煩惱は起こり、欲と怒りと妬みはなくなりません。浅ましい身です。それに牛や鳥や魚などの他のいのちを食べることによって、他のいのちを殺している、申し訳ない生き方を止められない、愚かな身です」

B 「煩惱についてももう少し詳しく話して下さい」

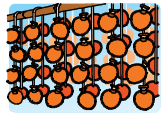
A 「老病死の不安は、いつまでも若くありたいのに老化する嘆き、病気になる不安、病気が治らぬ不安など、死ぬのではないかという根本的な不安があります。そして死後どこへ行くのかという不安、生計の不安や人間関係崩壊の不安、世界の戦争や気象、核やCO2の不安など、不安だらけの人生です。この不安の元には我執我愛の煩惱があります。それから愛欲への執着、名声への渴望、経済的な安定を過剰に求める欲求、他に負けまいとし、勝れた人へのねたみそねみという比較

煩惱。それから肉食に連なる殺生を止められないという悪があります」

B 「こうした悪業煩惱の身であるままでアミダ仏に引き受けられ、乗せられ、浄土に運んでくださる大悲の願力がましますのですね」

A 「ハイ。悪業煩惱の身にもかかわらず、大悲のいのち私を受け取って生かしてくださっているのです。受け取ってくださっているのです。この事によって、かえって自分の煩惱の盛んなことを知らされます。アミダ仏はこのような私を引き受けて浄土に生まれさせてくださるのですが、この恵みを知らされることによって、逆に煩惱悪業の身であることを知らされるのです」

(了)



## 【住職雑感】

十月二十一日、高校の関東における同期会に出席。十六名で有楽町のレストラで楽しく語り合った。男性は八人ほどだったが、各種の病気にかかった人は多く、また連れあいを亡くした者が三人もいた。その後、同期生でイスラム学者で知られている塩尻和子女史を訪ねた。女史は体調を崩していたが、無理を押して会って下さった。二時間近くも熱のこもったお話を承った。中東の平和、宗教間の平和を願う篤い情熱が伝わってきた。問題の関心が世界的で並の人ではない。今日の中東の状態、イスラム教徒の状態はあまりにもひどく、こういう中東の状態は過去のイスラム世界の歴史にはなかったほど悲惨なこと。原因はいろいろあるが、欧米のキリスト教を母体にした諸国の「イスラム教」への無理解、誤解、偏見に依るところが大きく、ひとことではいえない「イスラム教徒への蔑視」にあるという。この誤解・偏見の影

響は日本にも及んでいる。

「イスラム教は怖い宗教であり、テロを容認し、排他的な宗教である」というようなイメージを私たちはいつの間にか持たされている。歴史上、イスラム教国はむしろキリスト教国よりも暴力は少なく寛容であった。

イスラム教は決してテロを容認しているわけではない。一部の過激なグループのテロがイスラムの全体のように評価されてしまっている。しかもそういうテロの要因は西欧列強の近世における中東での支配と、一〇九五年以来二〇〇年間も続いた十字軍遠征によるイスラム教への蔑視と嫌悪感からくる厳しい抑圧、それ

への反発からであること。

イスラム教徒のテロ事件への報復として大規模なイラク戦争が起こり、これが正当化され、極めて多数の犠牲者（六五万人ともいわれる）が生まれたこと。西欧列強が中東を植民地的な支配をする前までは、一四〇〇年間、イスラム教徒は中東に住むユダヤ教徒、キリスト教徒、あるいはゾロアスター教徒などとおおむね平和的に共存していた。それが現在では、イスラエルとパレスチナの間のようななむき出しの敵対関係になって悲惨極まりないことなどをとお話と、いただいた女史の著作によって教えられた。

(了)

## 《念佛寺報恩講》

十二月二十二日（日）午後二時始

講師 山口県防府市

宮田秀成先生

\*なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話（念佛寺住職）があります。どなたでも自由にお参りください。

